

第5章 授業

1 授業の準備

(1) 指導案の書き方

※学習指導案の作成にあたっては、下記の要素以外にも「三観（児童生徒観、教材観、指導観）」や「評価規準」、「事前調査」などが盛り込まれることがある。また、指導案の作成が「学習指導要領」に則って行われることは言うまでもない。

【小学校「体育」をとおしての、本時の授業展開例】

◎本時の目標

◎本時の授業展開

指導過程 (時間)	学習のねらいと学習活動	評価と指導上の留意点
導入 (分)	<p>○学習のねらいを記述する。 ▲具体的な学習活動を記述する。</p>	<p>○学習活動に即した具体的な評価規準を位置付ける。</p>
<p>導入時には、「学習のねらい」を示し、「授業の流れ」を説明することで、児童が目標と見通しがもてるように工夫する。</p>		<p>評価規準に基づいた具体的な指導の手だてを想定して記述する。</p>
展開 (分)	<p>▲</p> <p>①学習内容の取扱に軽重をつける。 ②児童生徒の学習活動を重視した時間設定を行う。 ③児童生徒とともに考えたルール等を授業に生かす。 ④発言や質問の機会を設定する。 ⑤考える時間や話し合う時間を確保する。 等の視点をもち、授業展開の設計に取り組む。</p>	<p>指導上の留意点について記述する。</p> <p>安全面については、必ずふれる。</p>
まとめ (分)	<p>▲</p> <p>①グループによる話し合い活動 ②学習カードでの確認 ③自己評価カードへの記入 等、振り返り活動に十分な時間を確保・設定する。</p>	

- ◎ 準備する教材や教具
- ◎ 板書計画
- ◎ 評価

①「運動への関心・意欲・態度」の評価は、学習カードだけにとどまらないように工夫し、単元指導を通して評価することを意識する。

②他の観点については、授業観察の積み重ね、資料等からの確に判断できるよう学習のねらいを押さえる。

(2) 教材研究

教材研究は、PDS Iのサイクル、つまり Plan（計画する）Do（実行する）See（評価する）Improvement（改善する）で行う。

Plan（計画する）の段階では、教材を取り上げた目的が何であるかを明確にし、子供たちの実態から指導計画を考える。

Do（実行する）の段階では、時間配分や教員の指導・助言の様子などを実践記録として残し、具体的な検討材料を確保する。

Improvement（改善する）では、評価に基づき具体的に授業改善をし、再度、提案授業を行う。

See（評価する）の段階では、授業記録を基に授業を振り返り、成果と課題とを明らかにしていく。

【教材研究の流れ】

教材研究の過程及び内容

- 1 単元のねらいを明らかにし、取り扱う教材の内容について読み調べる。
- 2 学習内容との関連から子供の実態を把握する。
- 3 身に付けさせたい力が明らかになるまで関係資料等で調べる。
- 4 子供の実態から学習内容を精選する。
- 5 単元計画と本時の指導過程を考える。(管理職、主幹教諭、先輩教員に相談する。)
- 6 主幹教諭、先輩教員に授業記録を依頼し、授業実践を行う。
- 7 自己評価及び管理職、主幹教諭、先輩教員からの指導・助言を受け、成果と課題を明らかにする。
- 8 評価に基づき授業改善を図り、再度提案する。

(3) 教材教具の準備

子供たちに、「楽しくわかる学び」を提供するためには、教材研究とともに、教材教具の準備が大切である。そこで、教材教具には以下の4つの例があることを理解した上で、子供の実態、授業の内容等から適切に活用していくことが重要である。

《文字が中心となるもの》

教科書、新聞、小説、詩、文字カード、ワークシート、パンフレット、辞書 等

《音声を中心となるもの》

CD、テープ、歌、放送教材、教員の説話、録音したインタビュー、パソコン 等

《画像等を中心となるもの》

VTR、映画、テレビ、紙芝居、DVD、パソコン 等

《その他》

実物、絵、写真、図、表、人形、模型 等

特に、自作の教材教具は、子供の学習への興味を一段と高めることができる。

2 授業の進め方

○はじめに

教員の言葉遣いは、子供の手本になります。そこで、まず教員が丁寧な言葉遣いをすることが大切です。話し方などもきちんと子供に示すことが必要です。叱るときも感情的に怒るのではなく、なぜ叱られたのかを理解させます。

(1) 授業規律

学校生活を楽しく過ごし、しっかり学習するため、学習の仕方、学級生活の仕方などとともに「これだけは絶対してはならない」という事柄も含め、クラスでルールを決める必要があります。そのルールは、シンプルで、クラス全員が実行できるものにする必要があります。

[始まりの挨拶] [終わりの挨拶] [挙手のしかた] [話の聞き方]
[発表のしかた] など

発表の例 (小学校高学年) 「ぼくは、〇〇と思います。なぜなら〇〇だからです。どう思いますか。」(パターン化)

理由を述べさせることで、他の子供が考えることができます。一人が発言して終わるのではなく、必ずその発言から他の児童生徒に考えさせることが大切です。「同じように考えた人は?」「少し違うことを考えた人は?」など、一人の発言をみんなのものにするとよいでしょう。理由が言えない子供の場合は「なんとなくそう思いました」でもよいと思います。発達段階に応じた述べ方にするとよいでしょう。

[聴き方]



[声の大きさ]



話を聴く姿勢（心構え）や、声の大きさなど、クラスの約束として決めておくとうよいでしょう。教室に、掲示しておくとう、いつでもそれを見ることで約束が徹底されます。

机の上には、余分なものは出さないようにさせます。特に小学校では、ノート、教科書、筆箱なども置く位置を決めておくとうよいでしょう。

また、タイマーを用意して、作業時間の区切りなどわかるようにするとよいです。グループでの話し合い、作業学習、ドリル学習など一定の時間の区切りが必要なときには効果的です。

適切なタイミングで、クラスルールについての確認や評価をすることも必要です。

(2) 発問のしかた

発問は、具体的で分かりやすい言葉で行うことが大切です。問題は、既習の知識、経験で考えられるもの、いろいろな考え方ができるものがよいです。一人が答えて終わり、という形ではなく、何人もの意見で話し合えるようなものがよいでしょう。また、子供の発言で授業が展開していけるような工夫も大切です。

(例) 発問に対して①個人で考える②グループで考える③全体で考える

- ・「今日の学習のめあては〇〇です。今日は、このことをみんなで考えましょう。」

何をその時間に学習するのか、1時間の学習の見通しをもたせることで、学習に対する目的が生まれます。

例①体育「バスケットボールで、ボールを持っていない人が、どう動くときか考えましょう。」

例②算数「平行四辺形の面積をどのようにしたら求められるか、考えましょう。」

例③国語「ごんを撃った後の、兵十の気持ちを考えましょう。」

学習中の発言では「なぜ」そう思ったのかと聞くようにします。そのことで、教科書の文を根拠にした場合、全員で確かめることができます。そうでない場合も、理由をたずねあうことで、「なるほど、そう考えたのか」と自分と違う考えでも理解できます。さまざまな考え方を聞く場面をつくり、自分で考えさせることが大事な学習になります。

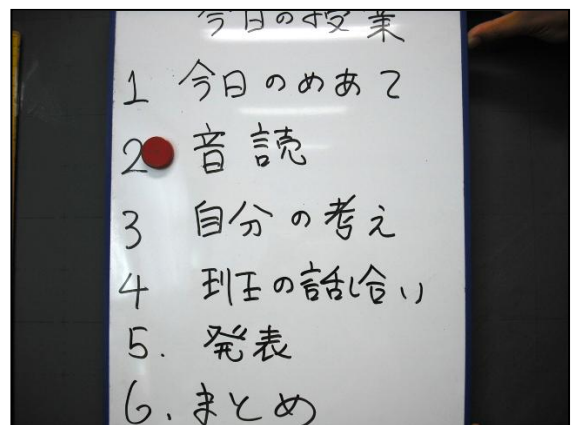
- ・スモールステップを考えておくことも大切です。

(3) 板書のしかた

- ・授業のはじめに1時間の学習の進め方について見通しをもてるよう掲示します。

(小さなホワイトボード、ミニ黒板)

- ・授業の流れの中で、今、何を学習しているかわかるようにします。(右の例はマグネットを置く)
- ・どのように板書をしたらわかりやすいか、事前に板書計画をたてておきます。
- ・言葉だけでなく、図で示して、なるべく構造的にわかりやすく板書するようにしましょう。
- ・書画カメラやパソコンなどを使い、子供の考えたことを黒板(スクリーン)に写してクラス全体で考えるようにするのもいいでしょう。
- ・子供にノートに書かせるときには、後で、見直しして、自分の考え方がわかるように、書かせます。他人が見てもわかるように、行を変えるなどして、見やすくさせるとよいでしょう。



(4) 机間指導

- ・誰が、どのような考え方をしているのかチェックします。子供のつぶやきを聞き、子供がノートに書いていなくても、つぶやき、考えをメモしておきます。また、良く理解できていない子には、考えるヒントや手立

てを教えるようにします。

3 授業後の振り返り

授業実施後は、授業を振り返り、その反省を次の授業に生かすことが大切です。

(1) 授業の振り返り方

授業を振り返る際の観点を授業の流れに沿って決めます。これらの観点について、A、B、C等で段階的に評価します。教員が繰り返し自己評価することで、本時の授業でよかった点、不十分な点や自らの弱点を明確にします。そして、その部分を意識的に補っていくことにより、子供たちにとってより魅力的な授業や指導力の向上が期待できます。

授業評価一覧表（例）

	評価項目	評価
事前	児童生徒の実態に即した指導案であったか。	
導入	ねらいに沿った的確な課題提示であったか。	
展開	適切な指導内容、教材であったか。	
	意欲付けを促す明快な発問や言葉かけであったか。	
	児童生徒の活動を取り入れた授業であったか。	
	必要に応じた机間指導や個別指導であったか。	
	無理のない進め方、時間配分であったか。	
	指導法の創意工夫がなされていたか。	
まとめ	ねらいが十分に達成されたか。	

※評価欄には授業後A、B、C等の評定を入れる。

授業の成否は、評価規準をもとに、本時のねらいが達成されたか否かです。

①板書

授業終了時の板書の状態で判断できます。学習の流れや成果が分かりやすく読み取れるような状態になっているかどうかを確かめます。

②ノートやワークシート

子供のノートやワークシートで判断します。きちんとノートに記述できているか、問題が解けているか、どこでつまづいているかをしっかり見取ることにより、次の授業に生かすように心がけます。

(2) よりよい授業のために

よりよい授業を作っていくためには、子供の実態を把握し、分析する力、教材を研究する力、指導技術を高める意欲が求められます。そのためには、身近な同僚や先輩から学ぶ、研修会に積極的に参加して学ぶ、書物やインターネットから情報を得て学ぶ等の方法が考えられます。また、研究授業を校内、校外を問わず、進んで行う。実践を重ねることにより、指導力に磨きをかけ、高めていくことができます。

全てが満足いく授業というのはなかなかできないのが現実です。大切なのは、常に授業を改善し、よりよくしていこうとする気持ちを持ち続け、努力することです。

第5章を読んで、自分が授業を構成していく上で気をつけなければならない事は何か、書き出してみよう

